

し、自らの命を絶った悲慘をも目のあたりにしました。終戦当初は、食糧、燃料等については陸軍糧秣廠からの配給によってなんとかしのいだが、それを断たれてからは、自ら奔走する以外にありませんでした。持っている衣類や貴重品を満鮮人と物々交換して食糧にしたり、材料を彼らから買って即席の餅屋さんをはじめたり、それは筆舌にはつくせない、辛酸をなめてすごしました。

二十一年には国府軍と中共軍の衝突による激しい市街戦の銃撃もありました。平定した中共軍は軍律がきびしく、統制がとれていたようです。

二十一年七月、苦難の車中生活に耐えながら、女だけの同居家族四人は命びろいをして錦西のコロ島に着きました。故国の博多港に着いた時は、抱きあつて感涙にむせびました。たった一つのリュックサックを背にして、故国の土をふみました。私と娘はとりあえず母のいる私の実家に帰りました。すでに実母はもうろくしており、ここには住めないと判断して、ほどなく、亡夫の実家に居候の身になりました。駅前旅館だった

ので、戦後の開墾ブームの技術者の宿泊などで忙しく、早朝暗くから夜遅くまで居候の気疲れの中で立ちづくめで働きました。あの肉体的な労苦が現在、変形性関節症（両膝）を誘発して終生の苦痛になり、それに耐えております。二十二年六月、息子がシベリアからの帰還を機に、旧陸軍の兵舎を急改造した板一枚の引揚者寮での生活もしました。戦後四十六年、引揚者が体験した辛酸は筆舌にはつくしえませんが。

## 満州浩良河開拓団の思い出

宮城県 佐藤 まつよ

昭和十九年四月、北海道より大秋馬産開拓団として満州三江省に入植することになった。牛や馬を持って行く開拓団は初めてだったので大変張りきっていた。本間寛団長以下二十戸先遣隊として空襲の真只中を不安ながらも出発した。鉛色の海はすごく荒れていて、立っている人もご飯をたべている人もいなかった。

牛や馬は脚をさらわれ、よろめいたり挙句は転倒するのもいた。四日目に羅津に着く。日本本土とは異なつた風景で、赤土の山、家は赤や青の屋根、歩く人々は白、青、ピンクときめられた色のようだった。翌日佳木斯駅に到着。駅より徒歩で約二十分の東宮記念館に一泊、いよいよ目的地浩良河開拓団に到着した。満人部落よりすこし離れた所に開拓団のバラックが三棟建てられており、そこに入居した。四月といつても満州は寒く、まだ荷物が届かなかつたから交代で炊事をし、日に三度塩をまぶしたおにぎりだけだった。

昭和二十年八月、大砲の音が聞こえてきて、ソ連軍が侵入してきたので速やかに避難せよとの命令がでた。そのころは十八歳から二十五歳の男子はみんな召集されており、残されていたのは年寄りと女子供ばかりであった。八月十三日、開拓団本部よりの連絡は、一人三個までの荷物を持って午後五時まで駅に集まるようにとのことであった。駅まで荷物を運ぶには、開拓団と駅との間に大きな河が流れており、その鉄橋を渡らなければならず、鉄橋は高さが約十メートル、長

さは約三百五十メートルもあり、荷物を担いで渡るには足もとがふるえ、目が廻りそうになるのを必死になつて渡つた。満人たちの略奪も始まり私達が家に残した布団を担いで来る満人と出会つたりした。母は赤飯を作りそれを豆と一緒に炒めたものを一人二升ぐらいずつ背負い、一人三個と限定された荷物をどのようにまとめるかが大変な作業でもあつた。その日はどんより曇つてもいたので着物は着れるだけ身につけた。家を出たのは午後二時ころであつた。

その時父は六十歳を過ぎていたが、このほかに米三升を持ってくれたが、あとでどんなに助かつたか。駅から無蓋車に乗り込んだ。その時家族は、父母、姉夫婦とその子供三人、兄、雇人の十六歳の少年それに私の十人であつた。どの貨車も満員のまま汽車は一路南下した。

汽車に乗つたら雨が降り出し翌朝あがつたが、みんなず濡れであつた。途中の駅で下車し焚火しながら衣類を乾かしたりした。線路には汽車が一杯であつた。隣りの汽車には兵隊が乗っており、その兵隊がカンパ

ンやミルクを投げてくれた。食べものが悪い時だけに大いに感謝した。ミルクは穴を開けての廻し呑みであった。その間、すこしの時間で炊事をする。そんな時に「出発」の命令が出たりして、半煮えのご飯をそのまま持ち込み出発することがたびたびであった。

やがて南又飛行場に到着した。大きな格納庫に約一か月滞在した。八月は雨期であり毎日のように雨が降った。コンクリートの床は水浸しとなることが常で、その上にアンペラ一枚敷いただけだから夜は体が冷え込む有様であった。

その時、子供たちが麻疹にかかってしまう。布団はなく毛布一枚を四つ折りにして寝かせたが、医師もおらずどうすることもできない。一人二人と寝込んでしまいが、食物もなくみるみる瘦せてしまう。「死んだら駄目よ。」と言ったら「死にたくない」との切ない声がいまだに耳に残っている。そして「秀一」は死んだ。忘れもしない。その夜は風が強くまっ暗闇の中飛行場の片隅に穴を掘って埋めた。哀しみの中戻ると、すぐ大隊長から「出発準備」の命令があり、みんな荷

物を纏め背負った。中には前後左右に荷物を吊り下げその上天秤棒で担ぐ者もいた。隊長から四人で並び離れないよう注意があったが、それが歩くだけで精一杯の行進であった。

南又から新京に。新京に着いたら、既にソ連兵がたくさんいた。新京の大和寮で約十か月過ごすことになった。日曜日となるとソ連兵が附近で自動小銃を撃ちまくるので生きた心地がしなかった。またある日、中国国民軍と八路军との市街戦があったりしたが、一夜明けて街が静かになり、ソ連軍が引きあげて行ったこと、やっと安心して街を歩けるようになった。

生きるため、見張りの目を盗んでは、機関区から石炭を運び出しそれを売り生活の足しにした。中には発見され射殺される者も出た。よくも生き延びてきたかという毎日であった。新京への途中「しのぶ」二歳、新京では「昭道」四歳を、兄たちはこの間一べんに三人の子供を亡くしたわけだ。新京では発疹チフスに罹らない者はなく私もその一人で、周囲からはもう駄目だと言われ棺も用意される有様だったが、よく生き延

びて来たものと思うし、日本の土を踏むことができた。  
感激は忘れることはない。

## 一生いたむ戦争の心のきず

宮城県 板橋 エナ

夫は、開拓団の本部勤めでしたので、水田は朝鮮人、畑は満人に作らせていて馬一頭、乳牛二頭、蜜蜂二十群がいました。昭和十九年五月召集令状を受けて連絡はとれず、子供は四人長男は昭和二十年四月小学校に入學し家族はみんな元気でした。

ところが、昭和二十年八月、ソ連軍の突如の侵攻、そして敗戦、大変なことになりました。四人の子供を見守りながら、荷物の取纏めや脱出のための食事の準備、炒米、肉の煮込みなど夢中でした。四・五日経った時、日本人は狙われていて危険だからというので、部落のいか所に集まることになりましたが、私は自宅で子供を守りました。

その晩集まった人達は暴民に襲われ、畑の中に逃げ入る人、大きな桶に隠れた人、そんなことで身を守ったのです。今度は本部に集まるようにとの連絡でした。二日程経った日、団長が、自宅に籠っている私達を心配し無理矢理本部に収容され、こうして不自由な生活が何日か続きました。

九月九日昼ごろ突如暴民が多勢襲って来て、みんなは子供を連れて山の中へ逃げました。私は逃げ遅れてしまい、暴民に金を出せと脅され、そして棒で叩かれたりして、拳銃、部屋から布団や衣類を一切持ち去られました。私は、叩かれ、どす黒く腫れ、痛みに耐えながら必死に子供を守りました。十日昼ごろ再び暴民の一団が襲ってきたのでこんどは逸早くみんな山中に逃げました。その時青葉や安祥の開拓団の人々も襲撃され、命からがら逃げて来ました。そうして四つ五つの団が集まったのです。

何とか自衛手段を取るべく翌十一日から屋根や門に見張り人を置き、女子供は倉庫の奥にひそめました。しかし、乗馬し銃を持った何人かを先頭に槍や棒を持